

教職員・院生版生協だより

送別特集号

# かけはし

発行 名大生協理事会  
編集 名大生協教職員委員会  
☎ 学内線 7540, 学外線 781-1111

## それぞれの思い出

—退職される教職員の方々から—

この春もまた、多くの教職員の方々が定年（停年）を迎えられ、名古屋大学を去って行かれます。長い間、ご苦労様でした。みなさまにとって名古屋大学で過ごした年月は、人生の貴重な時間であったことでしょう。

今回、みなさまの名古屋大学で過ごした「それぞれの思い出」を、寄せていただくことができました。みなさまの貴重な体験を教訓にさせていただきます。ありがとうございました。

2008年3月

名古屋大学消費生活協同組合・教職員委員会

### 退職されるみなさまへ

長い間名大生協の組合員として生協をご利用・ご支援いただきましてありがとうございました。みなさまからお預かりしています出資金を活用して生協の運営を行ってまいりました。

名大生協では、退職されるみなさまに「名大生協後援会」への加入・移行をお勧めいたします。後援会員は、退職後も引き続き生協のお店や各種サービスをご利用いただけます。詳しいことは、下記組合員コーナーまでお尋ねください。また、名大生協を脱退されるみなさまには出資金をお返しいたします。

「後援会」への加入、および脱退の手続きは、お手数ですが印鑑と組合員証、また、「出資金預り証」の発行を受けた方はそれも一緒に持参の上、組合員コーナー（北部厚生会館2階、内線7540）までお越しください。

## 理系カフェテリアと緑のトンネル



大村 百合 (生命農学研究科・教員)

名古屋大学農学部（大学院生命農学研究科）にて、魚類松果体の機能形態学的研究に携わって約40年を過ごした。この間、カナダモントリオール大学とドイツギーゼン大学で共同研究に従事した3年半を除けば、ほとんど毎日理系食堂（後にカフェテリア、ダイニングフォレストと改名）で昼食をとり、連休が続こうものなら体調不良に陥るほどであった。理系食堂のメニューは気配りがこまやかで、たいへんおいしかった。この10余年は自ら、雑穀米、色とりどりの野菜、ほどほどの魚介および肉類、種々の香辛料等を用いて調理にも時間を費やしているが、生協の昼食なしには名古屋大学の研究生生活は成り立たなかったといっても過言ではない。

理系食堂の良さのもう一つ大きな要素は、緑のトンネルの存在ではないかと思われる。本山から四谷通りの坂を上り三丁目交差点を過ぎて左へ入ると、初めての人はたいへい驚喜する緑のトンネルがある。このトンネルの所々は途切れていて、樹木の種類も古くからあるカシ、コナラ、アベマキを中心にマツ、サクラ、モミジ、モミジバフウ等が混在しているが、農学部の奥まで続いているので昼食に理系食堂へ通うことで散歩を兼ねたりフレッシュができる。カシや

コナラの枝がすぐそこまでせまるダイニングフォレストの広く開放的な窓辺で昼食をとりながら、名古屋大学の他の諸施設ももっともっと深い緑に包まれてほしいと願うものである。

魚類松果体研究のきっかけは、当時（1960年代後半）日長時間を調節してサケマス類の成熟・産卵を制御しようとする気運が国内のみならず国際的にもたかまっていたことや、光受容・メラトニン分泌器官である魚類松果体の成熟・産卵機構における役割を解明したいという情熱が農学部水産学講座（現水圏動物学研究分野）にあふれていたことによる。長年にわたって成長と産卵を続けるニジマスでは、仔稚魚や若魚のみならず成魚でも松果体上皮に増殖細胞が豊富にみられ、その一部は光受容細胞に分化していることを最近明らかにすることができた。魚類の成熟・産卵機構における光情報の伝達経路の中で、松果体が重要な役割を演じていることが以前にもまして強く示唆される。世界的需要の増大による水産資源の枯渇や気候変動による食料不足の危機に対しても、ますます研究成果を積み重ねることによって解決されることを期待してやまない。（おおむら・ゆり）

## 名古屋大学の思い出



杏名 宗春（工学研究科・教員）

昭和38年に名古屋大学に入学したころは、本山の地下鉄の駅から教養部の建物まで、舗装もされていない歩道を約20分掛けて歩いて通いました。その頃は、化学の実験などはまだ第八高等学校があった滝子の校舎で行われました。

この滝子の校舎で思い出として、小山の上に小屋があり、鯨宝生会（能のサークル）の練習を毎週、教養部の製図の先生、溝口先生にご指導いただいたことがあります。3年生からは工学部1号館や2号館で授業を受けるようになり、専門の勉学に力を入れようと思い、1～2年生と続けてきた鯨宝生会（学生能クラブ）の活動を断念しました。4年生になると講座配属がなされ、私は金属学科の第5講座「金属加工学および溶接学」に希望通り配属されました。

大学院工学研究科金属工学専攻の博士課程を満了した昭和47年は「重厚長大」の最

中で、民間の重工業に就職し、10年間ものづくりの実際を学びました。

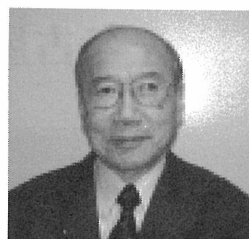
昭和49年6月から1年間、MITに客員研究員としてポストンで留学生活を送り、欧米の文化や社会を勉強できたことは、その後の教育、研究生活に大きな影響を与えました。

9年間の名古屋大学での学生生活、10年間の企業活動、26年間の名古屋大学での教育・研究生活は、自分を3つの環境に移し、教育・研究、技術開発に身を投じることができたのは有益であったと思います。

私は溶接工学からレーザー加工技術まで40年間 物づくりを学んできました。私の造語は「第4の波：光機電脳時代」で、今後も（株）Advanced Laser Technology Research Center (ALTREC)を独自で設立し、名古屋大学を誇りに思い、今の研究・開発を発展させたいと思います。社会の発展のため……。

（くつな・むねはる）

## 名古屋大学の思い出



島田 康弘 (医学系研究科・教員)

名古屋大学附属病院の生協に行った覚えは2, 3回はありますが、大学自体の生協には行ったことがありませんので、この題名を「名古屋大学の思い出」とさせていただきます。その意味では、私は生協には入っていたが、劣等生であったと思っています。

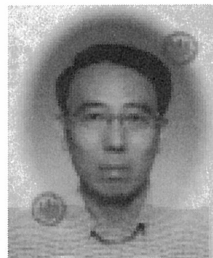
私は1985年に阪大から名古屋大学教授として赴任しました。当時は麻酔学講座といってもマンパワーが足りず、すべての麻酔をかけているのではなく、集中治療室もまだ組織されていない状態、すなわち大変不完全な講座でした。それも2年の内にすべて解消しました。私もその間は当直までしたことを思い出します。1998年には病棟が新築され、2004年4月から国立大学独立法人となりました。それからは収益拡大を意図した手術件数の増加が図られています。2005年には待望の新中央診療棟ができ、麻酔科は、術中記録はもとより術前及び術後回診も電子化されました。手術室も東洋一といわれるくらい広々ととってあります。

麻酔について少し述べます。麻酔という

のは他の分野と違い患者さんを直すわけではありません。患者さんは、麻酔で人が死ぬなどとは思っていません。でも死ぬことはあるのです。医療者のうっかりミスもあるし、患者さんの状態が悪いこともあります。また、その原因を調査していくと深いものがあります。いままで確率に関するデータは皆無に近いものでした。最近では日本麻酔科学会が主になって、学会所属の病院からはデータが集まるようになりました。でも、ご存じのように世間には学会に属していない病院がたくさんあり、そのような病院からは、患者さんや家族の方からの訴えがない限りデータは出てきません。私は、データを集めることや患者さんや家族の訴えを聞くことは自分の責任であると考え行動してきました。その意味で、麻酔事故が起きたときにはどのように考え対処すればいいのかについて学生に講義で言い続けたこともいまとなってはいい思い出です。

私はこれからもこの方面の仕事を続けていくつもりです。 (しまだ・やすひろ)

## 名古屋大学生協と「かけはし」の思い出



### 広木 詔三 (情報科学研究科・教員)

名古屋大学の生協は、学生や院生の理事の協力を得ることによって、たいへんうまく運営を行っていると思います。ひととき私も理事になって、いろいろと勉強になりました。月に一回の理事会でしたが、何かと多忙なので辞めさせていただきました。

「かけはし」への投稿は、もう10年以上にもなります。5、6年前までは毎月だったので、とてもきつかったのですが、「かけはし」の原稿を書くことは生き甲斐でもありました。何よりも、文章を書くということは私にとって有益でした。

現在投稿している「新フィールド・ノート」を連載するだいぶ以前に、たんなる「フィールド・ノート」を17回連載しましたことがあります。このときの方が、文章が素朴で、感想も多く載りました。だんだんと書き慣れてきて、そのうち思いついて好き勝手なことを書くようになりました。年のせいかと思いますが、最後の3回は自伝風になってしまいました。ご容赦下さい。

マンネリ化して、内容がつまらなくなると、感想に反応がなくなりました。ときどき、赤塚保雄さんや玉木一郎さんのはげましによって救われたものです。この場をお借りして、このお二人と、読んで下さった多くの方々にお礼の言葉を述べたいと思います。また、毎号原稿をチェックして、あらゆる情報網を駆使して間違いを見つけて直していただいた箕浦さんに感謝します。

この3月の105号で終了する予定でしたが、頑張らって107号まで3つ書きました。いつもは、締め切りに追われるのですが、2月の半ばには書き終えて投稿しました。ところが、この「思い出」特集号が遅れているので、発行もずっと遅れると

いうことでした。そのことを聞くと、もうひとつで108号だ、と煩惱のささやく声が聞こえてくるではありませんか。でも、106号以降は、4月号以後に載せるというので、止めることにしました。

かつては授業で、学生さんが私のジョークに反応したのですが、最近は学生さんがよそよそしく、自分が無能のように感じるが多くなりました。4月からは豊橋の愛知大学で何と500人もの学生を相手の授業をすることになっています。

恐ろしい気がします。私の「かけはし」の内容も一方的で、若い学生さんの感性とはますますかけ離れてしまったように思います。井上ひさしがだんだん読まれなくなるのもむべなるかなとも思います。

「かけはし」には私の人生が詰まっています。つい、昨日も、韓国に行ったときはいつだったかを確かめようとして、寝る前に「ソウル」(かけはし No.243号)を読み返してしまいました。

写真は2002年のパスポートのものです。韓国での国際生態学会に出席するために取得したパスポートで、不整脈を起こして死にかかる一歩手前のものです。よく葬式のとくに、死の直前の写真ではなく、少し前のやや若い感じの写真を用意しますが、それと同様です。ただ、私を知っている人でないと、この写真からは、今の実際の私を見分けることが出来ないかも知れません。

今日は3月7日の金曜日。2月半ばから厳しい寒さが続きましたが、やっと暖かくなりました。もう、ジンチョウゲがほころび始めていました。

4月以降も、土・日には、名古屋大学の中央図書館に通うつもりでいます。(ひろき・しょうぞう)

## 思い出— 生協の存在理由あれこれ



福家 俊朗（法学研究科・教員）

大学生協というものがあることを知ったのは、大学の委託業者の経営する食堂の定食の値上げに反対する学生の間で、生協を設立して学食（懐かしい？用語である）を経営してはどうかという話が広まった時のことである。不透明な値上げの理由を質しつつ、生協設立についても大学当局（これも懐かしい用語である）との間で話し合いが持たれたが、いっこうに埒があかなかった。もっとも、寮を出て自炊生活を始めていたこともあり、生協設立への関心が薄らいでいった。

次の大学でさらに2年ほど学生を続け助手時代を過ごしたが、生協はすでに設立されていた。食堂と書籍や文具を販売する狭い店舗があり、便利だった。ただし、値段はともかく、不味い定食には閉口し、生協の存在理由も半減していた。

教員として赴任した次の大学には、生協がなかった。都心にあるその大学の周辺には、色々な種類の安い但不味くはない定食類を提供する食堂がたくさんあった。そのために、生協の必要性を感じなかった。

名古屋大学には、1980年に赴任してきた。出校した最初の日々に早々と名大生協の組合員になり、法学部のすぐそばの平屋のプレハブにあった書籍部に毎日のように通った。書籍利用班を通して、必要な本を

1割引で買えることが何よりもありがたかった。そのうち、80年代の終わりに、定年を迎える先輩の代わりに名大生協の監事役を務めることになった。むろん、2番目の大学生協とは比べものにならないその存在理由を実感してきたからである。ただし、在外研究等のためわずか2年で終わった。名大生協とのかかわりも、それら以外には同僚と「花の木」でとる昼食と研究室に配達してもらえる生協弁当程度で終わるかと思っていた矢先、文字通り青天の霹靂で理事長に就任することになった。大学生協というものがあることを知って、ほぼ40年経っていた。

名古屋大学は、法人化されて以来、その内外の風景が大きく変わろうとしている。このような動向は大学に限られたものではない。いわゆる国家を後景に退かせる振りをして公のほんらいの役割を軽減（規制緩和）し、弱肉強食の競争社会を創り出そうとしている21世紀に生きようとしている私たちは、すべての生活領域において、協同という相互助け合いの意義を改めて考えてゆかねばならない時代に面している。退職を目前に控え、いま世間を騒がせている事件と名大生協を通して、生協という社会団体に通底する存在理由を再確認させられている。（ふけ・としろう）



星野 香 (理学研究科・教員)

## 名大生協の思い出

45年前に入学したとき、出来たての教養部食堂があったが、そこでは飯を食うより「歌おう会」の場所としての記憶しかない。昼食は旧北部厚生会館に行く事が多く、60円のランチを食べた記憶がある。アルミの楕円型にご飯を詰め、何らかの肉類か魚類と野菜が既に盛られている楕円形の皿に盛切るやつである。味噌汁は付いていたような気がするが確かではない。そこには喫茶部もあり、カリカリのハムカツサンドイッチとコーヒーで済ますことも多々あった。生協では無かったが、第一食堂というところの味噌汁が具沢山でダシがきいた赤味噌仕立が好きだったので時々利用した。学部になった頃、今はなくなったプレハブの理系食堂が出来、オカズと皿飯？に味噌汁で80円のBランチが懐かしい。今は知らないが、当時の学生には学内の色々な食堂巡りが流行していたような気がする。

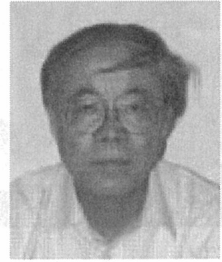
その後三十数年間、主に現フォレストカフェテリアの理系食堂を利用してきた。ここ数年前から教職員の理事として別の目から食堂を見るようになったが、現在の食堂は手作りのオカズが殆ど無いという事からも、本来の姿では無いと思っている。大量に作るの外食とは違った感じがしたけれど、厨房で中国籍のコックさんが大きな中

華鍋を振りながら中華飯の具を作っていたり、鮪職人が握った鮪を提供していたりした時代はなんだったのかと思うのは単なるノスタルジーかとも思うこのごろである。

最近、東大駒場の食堂には所謂学食では無い範疇の食堂ができたけれど、聞いてみると食材の多くは地産地消ではなく、工場で前処理したものが多かったと記憶している。名古屋大学に行くとき一流の食べ物が食べられるといった食堂が一つぐらいあっても良いと思うのは自分だけかなと思っている。レストラン「花の木」はその可能性を持ったところだと思うが、開業当時行っていた夜の営業が現在は出来ない事など、採算が合わないのようになっていいる。発想を変えていける要素は大いに有ると思う。最近、「花の木」での宴会に行った時思ったのであるが、料理のリストを作るとは大事ではないかと思う。それらをどういったタイミングで出すのかも重要な要素であり、ケータリングとは異なるので作り手の都合だけでなく顧客の意見も聞くようなことをしてほしい。食べ物の事ばかり書いてしまったが、一時は電化製品の殆どを生協セールで買ったように、時代の事情が反映する事は仕方が無いかなとも思っている。(ほしの・かおる)



## 記憶に残った答案



前田 尚利 (医学部保健学科・教員)

名古屋大学にきてから十三年になります。以前、五年ほど福井医科大学に在籍していたものの、赴任する前の八年近くは放射線科臨床医として市中病院に勤めていたので、教育現場に戻るのは久しぶりででした。放射線技師の育成教育に関してはズブの素人で一からの出直しでした。臨床英語から撮影法まで、いろいろな教育科目を担当することになっていましたが、核医学が専門でしたので、頭部の単純X線写真は撮り方もまた読み方も知りませんでした。頭部の撮影にはいろいろな撮影法があります。各種の感覚器官からの信号が頭蓋骨にある穴を通して大脳へ送られ、大脳からの信号も体のいろいろな部分に伝えられます。これらの信号を伝達する神経が一本の束になっていけばよいのですが、それぞれ異なった穴を通して外に出ているので、メディカル、パラメディカルの学生は場所と名称を憶える必要があります。聴覚に関しては、音の振動・体の傾きの信号が内耳道と呼ばれる、耳の奥（外耳道）からほぼ水平にやや後ろ向きに走行している直径が数ミリ、長さが1センチメートル足らずの孔を通して大脳に伝達されます。この聴神経に沿ってまれ

に腫瘍が発生します。腫瘍ができると内耳道が太くなることがあります。今はCT検査に取って代わられていますが、難聴の患者さんがあると耳鼻科のドクターは単純X線撮影で内耳道の太さを調べました。内耳道の穴の先から覗いて、それから真横から見ることができれば太さの変化は一目瞭然です。この問題を期末試験に出したことがあります。図と矢印を使っていろいろ工夫して答えてくれました。中には、山が外れたので知っていることを書きますという答案もありました。うんざりとするような長い解答の中に、1人だけ内耳道の解剖学的な位置とその走行方向を記述し、その「走行の接線方向とそれに直行する方向から撮影する」と基本的なことを3、4行で記述した学生がいました。

近年、学ぶべき知識の量があまりにも多くなったためか、学生がものを憶えてそのまま答えるという傾向が強くなった印象を受けます。いろいろな知識を積んでいくことは大切ですが、物事に関連性をつけて理解し、記憶していくことが大切なことを教えてくれた解答だと感心した次第です。

(まえだ・ひさとし)